

クルマ社会を問い直す思いへ

山中英生

クルマ社会を問い直す会 25周年おめでとう
ございます。思えば私も、大学の授業で、自動
車の量に合わせて道づくりする時代は終わった
との講義を受け、卒業論文ではクルマのスピー
ドを下げる日本で最初のコミュニティ道路づく
りに関わり、ひょんなことから大学研究者にな
って、かれこれ40年間、クルマ社会がもたらし
ている、さまざまな“おかしなこと”に気づき、
少しでもそれを正そうというテーマに取り組ん
できました。本会でお会いした方々の思いや、会
報にみられる新鮮な視点など、その時々の大切
な気付きをいただけてきました。

この原稿を書いている今、新型コロナウイルス
感染症のパンデミックという戦後最大の危機
の最中にあります。この危機で、移動や賑わい
という活動に制約が生まれています。こうした
人間本来の欲求である移動によって新しいもの
や人とふれあうという活動は、いずれ復活する
と思いますが、今回のパニックの中で、高齢者
の移動を支えてきた地方の末端の生活公共交通
などは、極めて厳しい事態になっています。個
室移動であるクルマへと移動手段が流れがちな
傾向は由々しい問題ですし、その流れをせき止
めるきめ細かな公共交通の維持・支援は今後の
最重要の政策の課題となるでしょう。

一方で、私がこの10数年取り組んできた自転
車については世界では不思議な風が吹いていま
す。世界の多くの都市で、シェアサイクル(共用
自転車)の利用増加が報じられていますし、イタ
リアのミラノ市では、都市のロックダウンの最
中に、解除後に主要なショッピング・ストリー
トの車道を削減し、住民らが少しでも距離を置
いて通行できるように歩道・自転車道を拡幅す
る「オープン・ストリート計画」を報じていまし
た。公共交通内の混雑緩和で感染防止をするこ
うなことなのですが、環境改善や健康増進が期
待されるからこそ、強硬な政策も「欧州で最も野
心的な対策」とも評されるのでしょう。アメリカ

のニューヨーク市でも感染拡大防止策として、歩
道・自転車道を増設する法制化が進み始めてい
るし、ハワイでは自転車販売が激増しているこ
ういうニュースも目にしています。

やはり個別的な移動であることも理由ですが、
むしろ、自分の体力に合わせて爽快な風を受け
て移動することで、体力づくりや気持ちをリフ
レッシュするといった、独特の楽しみを味わえ
る移動ということも、その価値を高めているの
でしょう。

ただし、日本の様子はやや異なっています。実
は自転車の見える姿は日本では“東京”に代表さ
れる大都市とその他の地方都市では相当に違う
のですが、すくなくともまずは大都市での変化
がマスメディアを賑わします。その反応は、“む
ちゃな走りをする自転車が増えた”というもの
です。ウーバーイーツの自転車は目立ちます。大
きなバッグをもって、明らかに車道をそれなり
の速度で走っています。もう一つは、ますます
経営が厳しくなっている公共交通から”自転車が
客を奪っている”という陰口です。確かに、いく
つかの調査でも、バスや電車から自転車を使う
ようになっているという数字がでています。

でも、よく考えるといずれも“クルマ社会”の
おかしな批判だと感じるのです。自転車が車道
を多く走るようになると、実は事故が減ってい
る。という現象は、自転車利用を促進している
多くの国で見られる現象です。クルマ利用を減
らすため、徹底して便利な公共交通を多くの公
的負担をしてでも整備してきた国では、自転車が
公共交通の敵だといった論調は見られません。
むしろクルマ社会を変える仲間なのです。

極めてシンプルな刃物、“包丁”が必ず家庭に
はあります。“包丁”は、人類の最初の発明であ
る石器をルーツに、シンプルで便利で安い“刃
物”として生き残ってきています。これからも、
このシンプルな道具は決して無くならないと思
います。人類の発明として次に出てくるのが“火”、

そして次が“車輪”です。多くの家庭にある“自転車”は、シンプルで安く作れて、しかも使い勝手のよい形として、“車輪”が生き残っていると感じています。これからもこのシンプルな乗り物は生き残り続けることを期待しています。

子供たちはこの人類の発明をたどって成長しています。ママゴトあそびで、偽物の包丁を使って遊んだ記憶は多くの人が持っています。車輪の方は、おもちゃの三輪車から始まり、補助輪付き自転車で自宅のまわりを遊んでいました。ところが、小学生でコマ外しの自転車に乗れるようになると、途端に世界が変わります。自転車に乗れるようになると、子供たちは自転車散歩という、自転車に乗ることそのものを楽しむ活動を経験します。そして、自分の周りの世界

を拡大するのです。そして同時に、行きかう交通や周りの人々への気遣いを学び、社会性を獲得していくといわれています。子供たちにとって自転車は最初に出会う本物の乗り物で、自転車は子供たちの成長にも大切な道具でもあるのです。

移動手段としてのクルマの存在価値と利便性は確かなものです。人類の発明“車輪”の一つの姿でしょう、でも、“それしかない、それだけでいい”、というような“クルマ社会”に対して、これからも素朴な疑問を見つけながら、様々なことに取り組んでいきたいと感じています。

(1999年日本母親大会分科会で助言者になっていた
だきました。徳島大学教授。徳島県徳島市在住)

